

210 肝疾患におけるシンチグラムとCT像について

関東労災 放

○古田敦彦, 伊東乙正, 橋 亨,

橋爪俊幸

横浜市大 放

田之畑一則

シンチグラムは、肝のCTスキヤンの実施にあたり参考になることが多い。そのようなことより今回肝のCTスキヤン57例中手術や剖検等により、ほとんど結果の判明した肝疾患17例についてシンチグラムとCT所見を比較検討した。両検査の優劣を比較してみると言うのではなく、お互いの長所をとり入れて、診断に役立たせることが目的である。両検査の実施日は余り長い間隔をとらないようにした。しかし両検査と剖検までの間隔が長かつた例とか、又手術時でも肝を外から見たり触れたりして、肝内に病変がある場合は不明のことがあるなど、問題があるにしても、他の諸検査等も参考にして症例を選んだ。

結果。ヘパトームは2例あり、1例はシンチグラムでは肝硬変症のパターンで右葉上極に明らかなSOLを認めたが、CT像ではウィンド幅をせまくしても判定しにくかつた。他の1例は、シンチグラムで大小不同のSOLとして認められ、臨床経過より肝硬変症より、ヘパトームと肝内転移とした。CT像では、腹水の所見と、大小不同の低吸収像としてとらえられた。次に2年半前にヘパトームのために、肝の約85%を切除後のシンチグラムと残肝が次第にその大きさを増し再生してきた状態を、両検査により供覧する。肝腫瘍の1例は、シンチグラムでは判別しにくかつたが、CT像では鮮明な低吸収像として認められた。肝内胆管の拡張は、シンチグラムでは、とらえられなかつたが、CT像ではやはり大小不同の低吸収像として認められた。本症例はCT像より稀れな、十二指腸癌よりの肝転移としたが、剖検により肝転移は全く認められなく、シンチグラム所見が正しかつたが、胆管拡張は分らなかつた。以上よりシンチグラムはヘパトーム、肝硬変等の診断にはCTより優れていると思われたが肝内胆管拡張や肝腫瘍等にはCTの方がよくその病巣を現わしてくれた。転移例は両者とも同程度ではないかと思われたが、現在症例を重ねつつあり、更に肝疾患全体に対しても追究していきたい。

211 肝のシンチグラムとCT像の比較

盛岡赤十字病院 放射線科

○鈴木俊彦, 戸田 宏, 松岡昭治

肝シンチグラムとCT像を比較し、各種疾患の診断能を検討する。

対象は昭和52年9月から昭和53年4月までの8か月間に、肝シンチグラフィ施行例227例、CT施行例110例中、両検査の施行間隔が1か月以内のもの74例である。疾患別にみると、肝炎11例（急性2、慢性9）、肝硬変13例、バンチ症候群1例、肝嚢胞4例、胆石症5例、その他良性疾患7例、原発性肝癌5例、胆道系悪性腫瘍3例、肺癌4例、胃癌5例、婦人科系悪性腫瘍8例、その他悪性腫瘍8例である。このうち肝転移を認めたのは12例である。

び慢性肝疾患において肝炎では、CT像は、肝の変形を伴い肝シンチグラム上SOLを疑った症例で、周囲臓器との関係を明瞭に描出していたが、その他診断上特異的な所見はなく、むしろ肝シンチグラムは、肝機能を反映する脾の描出等を参考にでき有効であつた。

肝硬変では、シンチグラム上典型的なパターンを呈した例が多く、CT像は肝辺縁の不整、脾腫を呈したが、肝シンチグラムSOLを疑った4例はいずれも腫瘍像は描出されなかつた。またCT像では少量の腹水の貯留が明らかであつた。

肝腫瘍性病変を呈した21例を比較すると、原発性肝癌では、両検査とも同じように腫瘍像が描出された。転移性肝癌では、シンチグラム上10例にSOLを認めたが、2例に描出を認めなかつた。また2例はCT像より不明瞭であつた。CT像では10例に腫瘍像を認めたが、肝シンチグラムでSOLを認めた1例は描出されなかつた。また両検査で腫瘍が描出されなかつた症例を1例に認めた。肝嚢胞では、両検査とも同じように腫瘍が描出されたが、質的診断においてCT像が優つていた。

閉塞性黄疸を呈した10例では、肝シンチグラムで2例が不均等なRI分布を呈したが、CT像では全例、肝内胆管拡張像が明瞭であつた。

肝シンチグラムは、false positive例が多くなる傾向があるが、小さな病巣の検出や、ある程度の質的診断が可能であるCTと併用することにより、それらの多くは鑑別可能となる。また腫瘍性病変において、false negative例はCTと比較しても少く、またび慢性肝疾患の診断にも優れており、スクリーニングの検査として、有効であると思われる。